

朝鮮近現代史における 3・1 独立運動の位相

康 成 銀

はじめに

- 1 朝鮮近代史の到達点としての3・1独立運動
- 2 3・1独立運動の展開
- 3 3・1運動の体験と記憶

おわりに

はじめに

今年は、日本の植民地支配からの解放を求め朝鮮全土で200万人以上の人々が立ち上がった3・1独立運動から100周年を迎える。朝鮮3・1独立運動は、ロシアの10月革命やウィルソンの14カ条をきっかけに高まった「民族自決」への世界的気運を背景にして、朝鮮半島だけにとどまらず世界各地に在住する朝鮮人と相互に連鎖しながら発展した全民族的な独立運動であった。また、3・1独立運動は日本や欧米諸国の植民地支配に反対するアジアの人々の民族解放を促したことから、アジアの民族解放運動の画期をなした。

本稿では、朝鮮3・1独立運動100周年に際して、改めて朝鮮近現代史における3・1独立運動の位相について考えてみる。そのために、まず、3・1独立運動以前までの朝鮮近代変革運動がどのような段階に達していたのか、次に、3・1独立運動の展開と特徴、「民族代表」、「大正デモクラシー」の内実について、また、翌年の1920年代から1948年の南北両政府の樹立まで、3・1運動の経験と記憶はどのように継承されてきたのか、最後に、3・1運動100年を迎えて、在日朝鮮人の立場から3・1運動の記憶を継承するために提起される課題について考えてみたい。

1 朝鮮近代史の到達点としての3・1独立運動

(1) 韓国強制「併合」以前の変革運動

朝鮮近現代史の始点をどの時期からと捉えるのか。朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国と略する）の歴史学界では1960年代前後期に朝鮮近現代史時期区分の討論会が行われ、①社会経済的变化、②階級闘争の変化を時代区分のメルクマールとして、近代史の始点を1860年代中葉に、現

代史の始点は1945年8・15解放と総括した⁽¹⁾。その後、1963年の討論会で、全錫淡らが討論総括に異議を提起し、「階級闘争説」を重視する立場から近代史の終点を1919年3・1運動とした⁽²⁾。共和国学界の時期区分論は大韓民国（以下、韓国と略する）や日本の学界でも受け入れられ、現在も朝鮮史学界のほぼ通説となっている。その後1970年代に入り、共和国で現代史の再検討が行われ、領袖・党・人民の三位一体の原則を方法論として、現代史の始点を1926年の打倒帝国主義同盟の結成からと見るようになり、現在にまで至っている。筆者は、朝鮮近代史の終点を階級闘争、変革運動の様相が大きく変化するきっかけとなった1919年3・1独立運動と考えている。

解放後、共和国の歴史学界では停滞論、教条主義、虚無主義などの植民地主義歴史観を克服することを最も重要な研究課題とした。このような研究方法を「内在的発展論」と呼ばれたが、1960年代の前後期に多くの成果を収めた⁽³⁾。韓国においても1960年代に入り、金容燮、姜萬吉などにより内在的発展論の見地に立つ研究が現れてくる⁽⁴⁾。日本でも1959年1月に朝鮮史研究会が結成され、過去の歴史研究の反省に基づいて新しい史学を目指すようになった。近現代史研究においてその先頭に立ったのが梶村秀樹であった。現在では梶村の「内在的発展論」を一国史的把握、西欧中心主義だと批判する向きもあるが、吉野誠が指摘したように外からの契機と内部の契機、上からの契機と下からの契機の矛盾・変動過程を事実に即して解明しようとしたこと、また欧米文明的な近代を主張する可能性にまで到達するような民衆レベルでの非西歐的発展の志向性を見いだそうとしたのである⁽⁵⁾。

趙景達は、「内在的発展論」における西欧近代中心主義を相対化しようとする問題意識から、朝鮮の伝統的な政治文化である儒教民本主義に着目し、1945年朝鮮解放までの朝鮮近代史を日本との関係史を基軸に考察した。そこでは、西欧近代やその亜流である近代日本のベクトルとは異なる、朝鮮に本来内在する近代、自前の近代を解明しようすることから、知識人中心の民族運動とは峻別される、民衆の願望が反映された「一君万民」幻想、世直しにまつわる迷信や流言、あるいは義賊に注目している⁽⁶⁾。

朝鮮近代変革運動は、開化派の運動（甲申政変、甲午改革）—独立協会一大韓帝国期の改革運動（「光武改革」）—愛國啓蒙運動へつながる上からの近代化運動と、民乱—甲午農民戦争—義兵闘争へとつながる下からの民衆運動に大別することができる。従来の研究では、この上からの運動と下からの運動は対立し、結合することがなかったと強調してきた。しかし、このような見方は一面的にすぎないだろうか。

1880年10月11日（陰暦9月8日）、朝鮮政府は御前会議で万国公法体系に参入し、開化政策を

(1) 朝鮮社会科学院（1962）『歴史科学』1962年6号。＊朝鮮語。

(2) 同上、1963年4号。

(3) 康成銀（2018）「朝鮮民主主義人民共和国における朝鮮史研究の歩み——近現代史を中心に」（2018年10月13日、朝鮮文化研究会第15回講演会で筆者が報告したレジュメ）。

(4) 康成銀（2018）「『朝鮮現代史』を考える——その定立のために」（2018年7月13日、朝鮮文化研究会第14回講演会にて筆者が報告したレジュメ）。

(5) 吉野誠（1990）「梶村秀樹の朝鮮史研究——内在的発展論をめぐって」（『商経論叢』〈神奈川大学経済学会〉第26巻第1号、1990年9月）。

(6) 趙景達（2012、2013）『近代朝鮮と日本』岩波新書。同『植民地朝鮮と日本』岩波新書。

本格的に推進することを決議して、内外政策を大きく転換させた。当時、政府内の開化派は、公法を顧みることもない弱肉強食の国際社会のなかで、公法を儒教的な論理（王道、礼）のなかに取り込むことによって、自主的に欧米近代の公法に対抗しようとしたのである。これは自然法主義に基づく公法解釈に近いといえる。後に、日本による保護国化を阻止しようとした高宗の行動には固有のある種の規範主義的な公法解釈がある。政府官僚や元老の上疏文、義兵将の檄文なども公法解釈の規範主義的な側面に依拠して保護条約の無効を指摘している⁽⁷⁾。

安重根は義兵闘争に際して、日本の「野蛮」に対して、「弱をよくして強を除き仁を以て悪に敵する法」を実現し、「信義」＝国際法に忠実たることをその戦略の第一としたように、彼の思想の根底には、「天賦之性」＝「天賦人権論」の立場から弱肉強食の現実を否定し、「道徳」への回帰を訴える伝統的儒教思想が重要な位置を占めていた。また安重根は、キリスト教徒としての信仰と伊藤博文を殺害した行動との関係について、「聖書にも人を殺すは罪悪であるとあります。しかし、人の国を取り人の命を取らんとするのに袖手傍観することは罪悪でありますから、その罪を除いたのです」と裁判で述べているが、ここにはナショナリズムとキリスト教的ヒューマニズムの結びついた抵抗の精神が見られる。安が民族の独立に自己をささげたことと、教会に忠実でありながら朝鮮人としての信仰の主体性を貫いたことの重さは、キリスト教と宗教の本然の姿勢に対する大きな問いかけとなるだろう。彼は獄中で『東洋平和論』の序文と本文冒頭を残しているが、それは欧米帝国主義の東アジア侵略に対抗して朝・中・日の自主独立に基づいた三国連帶とその実践方法を構想したものである。安の東洋平和論は、反帝国主義・自主独立・平和主義を基礎としつつ、まず、東洋三国が共同体を構成して世界に規範を見せようとするものだった。このように安の思想と行動にも規範主義的政治文化が現れている⁽⁸⁾。

下層民を主体とする甲午農民軍を目指したものは、「一君万民」的な平等社会の実現であった。現実可能性としても、全州和約によって、下からの農民軍の改革案と上からの甲午改革案が結びついで、自立的な近代化の道が大きく開かれようとしていたが、日本軍の弾圧により結局は押しつぶされてしまう。農民軍の戦いは、農民の真の解放なくして民族的な解放はありえないという、以後の、朝鮮のみならず、アジアの大多数の国々にとっての変革のあるべき姿を先駆的に示したものとして画期的な意義をもっていた。

「保護条約」以後には、専制君主国家を否定する動きがはっきりと現れてくる。新民会勢力は民権論を発展させて共和制に立脚した国民国家の建設を構想し始めており、後期義兵闘争でも、前期の抗日・反開化および君主権擁護という目的から、抗日・反封建闘争の性格が一層明瞭になった。日本軍は1909年から翌年にかけ、最後まで抵抗の大きたかった南部一帯で義兵弾圧（「南韓大討伐作戦」）を展開した。この戦闘で多数の義兵が殺害され、朝鮮国内での義兵闘争の継続は不可能となっていく。同時期には都市部を中心に愛国啓蒙運動（自強運動）が展開されるが、「併合」前に妥協主義的潮流と非妥協主義的潮流に分化し始めていた。孫秉熙をはじめとする天道教上層部とその影響下にあった大韓協会の一部上層部は、「近代化」を標榜しながら統監府に接近・妥協し、その

(7) 挿著（2005）『一九〇五年韓国保護条約と植民地支配責任——歴史学と国際法学との対話』創史社、2刷2010年。

(8) 挿稿（2016）「安重根義挙100年——日本における安重根研究の現況と課題」（李泰鎮・安重根ハルビン学会編著、勝村誠・安重根東洋平和論研究会監訳『安重根と東洋平和論』日本評論社）。

体制内で李完用内閣を打倒し自らが執権するための政治活動——「自治」運動を繰り広げた。二つの潮流は、大衆的基盤の欠如、分派的傾向などの共通した弱点をもっていたが、民族運動の生命線ともいるべき反帝・反日立場と闘争方法において明らかな差異がある。妥協的潮流は、いわゆる「文明開化」を謳い、「先実力養成、後独立」、「法秩序の尊重」を強調し事実上独立運動から後退していく。韓国強制「併合」前後に新民会をはじめとする非妥協的潮流や義兵の一部は中国東北地方やロシア沿海州に移住し、独立運動を継続するが、妥協的潮流は国内で合法的な宗教活動、教育活動を行う。1920年代「文化政治」下における民族改良主義の萌芽ともいべきものが、すでにこの時期に見られるのである⁽⁹⁾。

日露戦争による朝鮮の軍事占領以前には、朝鮮が自主的に内政・外交の改革を進め、朝鮮・日本・中国が連携していく道があった。しかし、その都度、日本は軍事行動を重ねる一方、政権内部に政治工作を展開し、変革主体そのものの軌跡を攪乱したために、上からの変革運動と下からの変革運動はその結合を妨げられた。こうして朝鮮は、20世紀前後期をもって一国後進資本主義発展の可能性を、外から破壊されてしまったのである⁽¹⁰⁾。

(2) 1910年代の反日独立運動——主体的力量の成長

1910年代の「武断統治」下の独立運動をめぐって、それは「閉塞期」のことであり⁽¹¹⁾、3・1運動はロシアの10月革命やウィルソンの民族自決主義に影響されたものであるという非常に皮相的な見方が一部に今もなおある。しかし、事実は決してそうではない。この時期の国内外における民族運動は途切れることなしに続いており、そのなかで民衆の抵抗のエネルギーは着実に蓄積されていった。

あらしのような弾圧のなかでも、国内各地では独立義軍府、朝鮮国民会など多くの秘密結社が活動しており、一方、近代的な民族教育内容を組み入れた書堂や労働夜学が民衆により身近な民族教育機関として普及していった。

注目すべき点は、この時期の国内の民族運動が労働者・農民などの民衆運動へと方向を転換し始めたことである。当時、土地・林野調査事業や増税に反発した農民・小商人は、土地・林野所有権訴訟を起こしていたが、測量妨害、駐在所・面事務所の襲撃など、より積極的な闘争を展開していく。1918年3月に江原道鉄原郡馬場面、全羅北道南原郡金池面で多数の農民たちが面事務所を襲撃した。同年6月には咸鏡南道文川郡ウンジェ面の農民500余名が憲兵隊を襲撃した。さらに

(9) 拙稿(1987)「二〇世紀初頭における天道教上層部の活動とその性格」(『朝鮮史研究会論文集』第24集、緑蔭書房)。

(10) 糠谷憲一(2011)「『韓国併合』100年と朝鮮近代史」(『朝鮮学報』第219集)。

(11) 朝鮮総督・寺内正毅は1915年6月26日に司法官に対して次のような訓示をしている。「今各地ノ状況ヲ察スルニ朝鮮統治ノ本旨漸ク一般民衆ニ徹底シ各自其ノ緒ニ安ムシテ業ヲ営ミ産ヲ治ムルニ至リ殊ニ当初所在ニ跳梁セル流賊暴徒ハ殆ムト其ノ迹ヲ絶チ都鄙将サニ靜謐ナルハ甚々喜フヘシ」と、朝鮮統治を自画自賛したが、その後続けて、「近時又慶尚咸鏡其ノ他諸道ニ於テ多數人民ノ騒擾事件相次テ起レルカ如キ頗ル憂慮スヘキ現象ナリ」と吐露しているように、朝鮮統治の期待と現実に対する相反する心情を読み取ることができる(水野直樹編『朝鮮総督諭告・訓示集成1』緑蔭書房、2001年)。

第一次世界大戦を契機に日本の資本が急速に浸透し⁽¹²⁾、それまでの自由労働者・鉱山労働者だけでなく工場労働者の数が増加⁽¹³⁾するにともなって、労働者のストライキも増えていった。『最近に於ける朝鮮治安状況』(朝鮮総督府警務局、1933年)によると、1912年から17年までの6年間の毎年平均ストライキ件数は6件、参加者数は958名だったのが、1918年に50件、6千100名、19年には84件、9千名に急増している。ストライキ数が増えたばかりか、1918年6月、平安南道江東郡の小野田セメント工場の600名の労働者が民族差別に反対して暴動を起こしたように、より積極的な発展趨勢を示すようになった。1919年2月、龍山スタンダード貿易会社の600余名の労働争議には憲兵隊が介入して鎮圧している。

国外では間島やシベリアに移動した義兵や新民会の人々が長期抗戦のための根拠地づくりを急いでいた。各地で自治団体、民族教育機関、軍事団体が組織され、それはやがて20年代に展開される独立軍の母体となった。言い換えれば、植民地下という状況の下で、「併合」前の義兵闘争と愛国啓蒙運動の両者が見事に合流し、より尖鋭化し、より大衆化した、新たな抗日戦線が形成されうる段階にまで至ったのだといえよう。

こういう主体的力量があったため、朝鮮の独立運動はロシア革命やウィルソン流の民族自決宣言の影響なども含めて、第一次大戦後の国際情勢にいち早く反応することができたのである。

2 3・1独立運動の展開

(1) 3・1独立運動の特徴

このころ国外の独立団体では、パリ講和会議に朝鮮代表を送るための計画を展開しており、国内では天道教、キリスト教、学生などの団体がそれぞれ独立運動計画を立案していた。一方で民衆の間にも、1919年1月に死去した高宗が実は総督府の回し者に毒殺されたのだという噂が飛びかい、民族意識がいやおうなしに高まっていた。そして2月8日、在日留学生が東京で独立宣言書を発表し、運動実践のために続々と帰国し始めた。こうした様々な動きがあるなかで、宗教団体指導者たちは、3月1日にソウルのパゴダ公園で独立宣言書を朗読する方針を決定したのである。

しかし、決行前夜に、学生が多数参加することを知った宗教団体指導者たちは、当日の発表場所をパゴダ公園から市内の料理店へ移し、朗読後になんと当局に自首してしまった。ところが、パゴダ公園に集合した学生・市民は宣言書朗読式を決行し、一斉に「独立万歳」を高唱したあと市街に繰り出した。これに多くの民衆が合流し、数万人のデモが広がっていった。ソウルと同時に、平壌・義州・宣川・鎮南浦・安州・元山など北部の諸都市でも運動が始まった。3・1運動は、初期には朝鮮北部地方の都市を中心にして青年、学生、市民などによる平和的な示威運動の形で始まった。3月中旬以降には全国的範囲に急速に広がり、農民、労働者をはじめとする各階層の民衆が積極的に参加するにつれ、また日帝の弾圧が露骨化するにしたがい、運動は次第に暴動化の様相を見せ始め頑強に繰り広げられていった。

(12) 1917、18年に三井系の朝鮮紡績株式会社、朝鮮製糸工場、朝鮮製紙工場、三菱系の兼二浦製鉄所が操業を開始した。

(13) 工場労働者数は1911年12,180名から1919年41,878名に増加。『朝鮮総督府統計年報』1920年。

朝鮮憲兵隊司令部が編纂した『朝鮮騒擾事件状況』（1919年）は、3・1運動の示威行動が激減し始めた1919年6月に開かれた各地域憲兵隊長・警務部長会議の席上報告をまとめたものである。これによると、民衆が運動に参加した直接的な動機、不満事項について、最も多かったのは民族的な差別であり、次いで共同墓地の強行、屠獣規則、森林令など、それまでの慣行を無視して近代的な制度に作り替えたことに対する不満、また、植民地財政を充當するために賦課された各種の税金、とくに酒税、煙草税、印紙税や土木、建設工事への賦役、土地収用などに対する不満が多かった。1919年の労働争議84件のうち、9件以外は3・1運動以後に起こっている。1919年10月、ソウルの東亜煙草会社の労働争議、同年11月、兼二浦製鉄所の労働争議などでは賃金引上げ、8時間労働制実施、賞与金引上げなどを要求している。また、京城印刷所、京城朝鮮煙草会社、京城ガス電機会社、龍山印刷所などの争議は、同じ工場で争議が1年間に連続的に組織された。1918年ごろから目覚めつつあった労働者、農民の運動は、1919年の闘争を通じて質的な変革期を迎えるようになったのである。

3・1運動では各種宣伝物、檄文、地下新聞が配布され、示威行進では太極旗が振られ、愛国歌が歌われた。このような示威が日常化することによって“我が民族”という意識が大衆化されていった⁽¹⁴⁾。

3・1運動は3月下旬から4月上旬にかけて最高潮に達した。全国218の府郡のほとんどで蜂起が起り、200万人以上が参加した。また、中国の間島をはじめ世界各地に居住する朝鮮人も「独立万歳」のデモを行った。

3・1運動は、第一次世界大戦後の大規模な反帝国主義運動として、中国の5・4運動など世界各地の民族運動を大いに鼓舞した。こうして、日本はその支配政策の変更を余儀なくされ、1920年代に至っては、「文化政治」なるものを標榜せざるを得なくなった。

3・1運動は、日本の米騒動や中国の5・4運動と抱き合わせに、東アジアにおける運動の新たな高まりとしてよく一括して捉えられるがちであるが、何よりも3・1運動の特徴は、民衆運動としてのその広がりの大きさにある。米騒動や5・4運動に比べても、その規模の大きさは際立っている。文字通り民族をあげての独立運動であった。日本の暴力的な弾圧により多くの死者を出すに及んだが、そのほとんどが無名の人々であった。3・1運動は朝鮮近代史における民族運動発展の到達点を示しているといえよう。

（2）「民族代表」の独立運動の内実

「併合」後、天道教やキリスト教の指導者は、国内の宗教・教育機関に身を置いて、総督府体制と抵触しない範囲内で宗教・教育活動を行う。彼らの3・1運動における動機と行動については、1980年代に刊行された警察・検事・地方法院予審・京城高等法院予審の訊問調書によって知ることができる⁽¹⁵⁾。「民族代表」の一人である崔麟も「私は警視総監部と地方法院予審廷と高等法院特別裁判部予審廷で、前後19回の取り調べと審問を受けたが（中略）すべての事実については、いっさい隠さ

(14) 金正仁（2009）「記憶の誕生：民衆示威文化の近代的起源」（『歴史と現実』第74号、2009年12月）。＊朝鮮語。

(15) 市川正明編（1983、1984）『三・一独立運動』（全4巻）原書房。

ないで事実のまま率直に話した」と書いている⁽¹⁶⁾。訊問調書と他の史料を照らし合わせると、「民族代表」の独立運動の内実は以下の通りである⁽¹⁷⁾。

孫秉熙は、「韓国併合」に対していわゆる「中立」を標榜した。それは天道教国家の建設を望んでいた彼にとって、「韓国併合」は民族の主権国家の喪失というよりも、墮落した朝鮮王朝の崩壊を意味するとしか認識できなかったためである。また、日帝が掲げた「一視同仁」、「内鮮融和」に一定の幻想をもっていたためであった。しかし、天道教上層部のこのようないくつかの「期待」とは反対に、「朝鮮人に対し日本人同様に待遇」してもらはず、天道教に対する弾圧も日増しに強まっていった。彼らは、次第に日帝の植民地統治に不満をもつようになった。このような時、「民族代表」が独立運動を起こす直接的な動機となったのは、ウィルソンの「民族自決」の提唱とパリ講和会議の開催であった。天道教およびキリスト教の指導者たちは、当初は別個に独立、もしくは自治を要求する運動を計画していたが、2月24日に天道教とキリスト教の連合が決定し、その後、仏教側も連合に加わり、ここに三教連合が成立した。27日夜には天道教経営の普成社印刷所で2万1千枚の宣言書が印刷され、28日から3月初めにかけて天道教およびキリスト教組織、学生たちを通じて、ソウルと各地方にひそかに配布された。しかし、「民族代表」の独立運動は、独立の意を内外に静かに伝えることに目的があり、それ以上の行動を起こすことは望まなかった。孫秉熙が28日朝、朴寅浩に「訓諭書」を送り、教徒が「軽挙暴動を為さぬ様に心得布教のことに努めよ」と注意したり、同日夜、最後の会合で、翌日大勢の学生がパゴダ公園に集まるという情報を接したとき、「民族代表」たちが急に発表場所の計画を変更したのも、まさにそのためであった。

「民族代表」は独立運動を計画し、独立宣言書を組織を通じて北部地方の諸都市に配布し、3月1日に一斉に独立宣言書を発表することで、3・1運動勃発のきっかけを作る役割を果たした。しかし、訊問調書を詳細に検討すると、「民族代表」には当初から「全民族的な示威運動」や「学生との連合」という計画はなかったことがわかる。彼らの運動は、日帝の「理性」に訴えて「自治」もしくは独立を目指すという妥協的性格、欧米列強の「同情」に期待するという外国勢依存的性格、そして自分ら一部グループからなる上層運動的性格をもつものであった。「民族代表」の独立運動の限界性は、3月1日のパゴダ公園から始まる民衆の実際の行動によって乗り越えられていったのである。

(3) 「大正デモクラシー」——「戦後民主主義」と「戦争民主主義」の相違

日本は朝鮮総督府の既存の暴力装置だけでは足らず、日本本土から軍隊・憲兵を増派し、素手の民衆に対して徹底的に武力弾圧を加えた。死者約7千500人、検挙4万6千人という数は、弾圧の現場が戦場そのものであったことを示している⁽¹⁸⁾。日本のこの戦争の論理は21年中国・間島大虐殺事件、23年日本・関東大震災大虐殺事件でも繰り返された。当時の日本は「大正デモクラシー」の時代であったと理解されているが、日本資本主義構造に組み込まれていた植民地朝鮮を含む「日本史」の総体から見ると、話は全く違ってくる。朝鮮人にとっては国内外のいざこに居住しようとも、

(16) 崔麟(1962)「自叙伝(略歴)」(韓国思想講座編集委員会編『韓国思想』第4輯、日新社)。*朝鮮語。

(17) 拙稿(1989)「三・一運動における『民族代表』の活動に関する一考察」(『朝鮮学報』第130輯)。

(18) 姜徳相(2008)「虐殺再考、戒厳令なかりせば」(『震災・戒厳令・虐殺——関東大震災85周年朝鮮人犠牲者追悼シンポジウム 事件の真相解明と被害者の名誉回復を求めて』三一書房)。

大正年間は最も過酷な時代だったのである。

「大正デモクラシー」の旗手といわれる吉野作造にしても、朝鮮人に同情心を示したが、植民地支配そのものを否定することはなかった。当時、大多数の日本人は、3・1運動を「騒擾事件」としてしか認識できず、朝鮮人に対する排外主義的な敵愾心を深めていった。こうした態度は、関東大震災時において軍隊、警察、「自警団」（民兵）の三位一体の戒厳令体制下での朝鮮人虐殺事件につながっていくものだった。

三谷太一郎は、日本の歴史上の民主主義は、すべて「戦後民主主義」であったという。戊辰戦争後の福沢諭吉らの「公議輿論」要求、西南戦争後の自由民権運動、日清戦争後の政党政治の活発化、第一次世界大戦後の大正デモクラシー、これらはいずれも、現在の「戦後民主主義」の先駆をなしたと指摘して、戦後日本の民主主義を否定する安倍政権の姿勢を批判した。三谷は、日本近現代史において戦争と民主主義を対立的に捉え、戦後民主主義を肯定的に評価し、安倍政権について戦後日本を否定する政権として捉えているのである⁽¹⁹⁾。これに対して中野敏男は、戦争と民主主義は原理的にも歴史的にも対抗軸にはなっていなかったという。自由民権運動の後に日清戦争・日露戦争が起り、「韓国併合」へと続く。大正デモクラシーの時代には3・1運動、関東大震災朝鮮人大虐殺が起り、「満州事変」以降は戦争の時代へと続く。戦後民主主義の時代も、朝鮮戦争、ベトナム戦争等の東アジアの戦争の時代であって、日本は「基地国家」として経済成長をなした。つまり、民主主義の時代と戦争の時代は連続しており、日本の民主主義は戦争とセットになった「戦争民主主義」であったと定義したのである。中野は、同じプロセスのなかで行使された植民地主義と排除の暴力が人々を「国民」の内に凝集させ、「国民」を国民と非国民、内と外に分け、内に作られていく民主主義は、外に向かう暴力と戦争に並行していたという⁽²⁰⁾。

3 3・1運動の体験と記憶

(1) 3・1運動体験がもつ意味

3・1運動体験はその後の独立運動に大きな変化をもたらした。

第一に、朝鮮民衆の3・1体験は、その後の独立運動の原点となったことである。例えば独立運動家たちの伝記類（金日成『回顧録——世紀とともに』、金九『白凡逸志』、李康勲『わが抗日独立運動史』、キム・サン〔本名張志楽〕『アリランの歌』、金擎天『金擎天児日録』など）を見ても、3・1の体験が彼らをして独立運動に参加せしめる契機になったことがわかる。共和国の故・金日成主席は8歳の時に起こった平壤での3・1運動に万景台の住民とともに駆けつけている。金主席は、「私の世界観は新たな段階へと飛躍した。大人たちにまじり、つま先たって独立万歳を叫んだとき、私の幼年時代はすでに終わったといえるであろう」⁽²¹⁾と述べているが、3・1運動体験が新たに革命家となる決意を固めるきっかけになったのである。キム・サンは朝鮮で3・1運動に遭遇し、「何千

(19) 三谷太一郎（2016）『戦後民主主義をどう生きるか』東京大学出版会。

(20) 中野敏男（2015）「報告——戦後70年に戦争民主主義を問う」（『2015年度科研成果報告集——戦争民主主義を問う』、シンポジウム記録『東アジアから見る戦争民主主義と戦後日本』東京外国语大学、2015年12月）。

(21) 金日成（1992）『回顧録——世紀とともに』日本語版・第1巻、雄山閣、34頁。

という他の学校の生徒や町の人々と隊伍を組み、歌いながらスローガンを叫びながら町中を行進した。私はうれしさで心臓が破裂しそうだったし、誰もが喜びにあふれていた」という体験をした。この体験が、「私の政治意識のめざめだったのであり、大衆行動の力が私をまさに根底からゆきぶった」と回想している⁽²²⁾。日本陸軍士官学校を卒業した後、騎兵連隊少尉に任官した金擎天は、3・1運動が勃発すると朝鮮を経てソ連領の沿海州に脱出し、朝鮮人パルチザン部隊の指揮者となり、ソ連赤軍とともに日本軍と戦った⁽²³⁾。

このような朝鮮民衆の3・1運動体験に比べ、日本の場合、原点と認識されるような幅の広い民衆運動の体験は稀であったといえる。例えば、日本の民衆運動の画期をなしたという米騒動の参加者はほぼ下層民に限られ、中・上層民やインテリは無縁であった。

第二に、朝鮮の独立運動がこれを契機に民族主義運動から社会主義運動へと移行していくことである。「私（キム・サン—引用者）は世界的大運動に重要な役割を演じているような気持で、至福千年がついに来たのだと思いこんでいた。二、三週間後に伝わってきたヴェルサイユの裏切りのショックは大変なもので、私などまるで心臓が裂けてとび出すかと思った。言葉を信じたわれわれ朝鮮人はなんと純真な感激屋だったことか！」⁽²⁴⁾。米大統領威尔ソンの「民族自決」論に希望をかけていた朝鮮の独立運動家は、パリ講和会議・ワシントン会議でその望みを絶たれ、威尔ソンの「民族自決」というのは大国の統治権を仮託するスローガンにすぎなかったことを知るようになった。朝鮮の青年はソビエト連邦や社会主義に望みをつなぐようになった。

しかし、民族主義運動から社会主義運動への変化は、一夜にして起こったのではなく、1920年代いっぱいが移行の過渡期であった。例えば国外では、独立軍による青山里戦闘や「大韓民国臨時政府（上海臨政）」の結成にみられるように、民族主義運動は以前にもましてより尖鋭化していた。国内でも全体的な独立運動、政治闘争は20年代前半にはまだ民族主義運動が中心になって展開しており、社会主義運動は個別の労農運動が主に経済闘争の形を通じて力を蓄えていた段階であった。社会主義運動が独立運動を主導するようになるのは25年の朝鮮共産党結成以降であった。

民族主義者も、社会主義者も、彼らはその表面的なイデオロギー対立にもかかわらず、具体的な闘争現場においては、多分に共通する課題を掲げていた。3・1運動以降の民族解放闘争史を顧みると、民族主義運動は、民衆の生活現実に根ざす諸要求に応えようとするなかで、単なるブルジョア国家としての独立の回復を超える「新しい社会」を希求していった。一方、共産主義運動を見ると、一時期、コミニテルンの「一国一党原則による現住国党加入方針」を受け、在外朝鮮人共産主義者は朝鮮革命とプロレタリア国際主義のはざまのなかで苦悩するが、1935年の第7回大会の方針により、再び朝鮮革命固有の課題=抗日民族統一戦線運動を正面からとりあげていくようになる。朝鮮をはじめ第三世界の植民地諸国における民族主義と社会主義は、単なる二律背反ではなかった。一方は民族性にいくぶん重きを置き、他方は階級性をより多く強調しているだけのことであった。実態に即して言い表すならば、社会主義的な民族主義者、民族主義的な社会主義者がいたということ

(22) キム・サン、ニム・ウェールズ著、松平いを子訳（1987）『アリランの歌——ある朝鮮人革命家の生涯』岩波文庫、74-75頁。

(23) 金擎天（2012）『金擎天児日録』学古房。＊朝鮮語。

(24) 前掲『アリランの歌』75頁。

とであった。朝鮮の独立運動はこのことをよく示している⁽²⁵⁾。

1920年代の国内の新幹会、中国東北地方の唯一党形成の試みや、1930年代に入って、中国東北地方の在満韓人祖国光復会（36年）、重慶の大韓民国臨時政府の「建国綱領」（41年）と左右合作、延安の朝鮮独立同盟（42年）、国内の朝鮮建国同盟（44年）はいずれも統一戦線組織として成長した。社会主义運動と民族主義運動の潮流は、対立と統合の過程を重ねて、最終的に収斂されていった彼らの建国構想は、土地改革と進歩的民主主義を基礎に両者が広く結集した民族統一戦線的な体制＝反帝反封建の人民民主主義革命の遂行であった。朝鮮独立運動史は抗日民族統一戦線の拡大が基本的な流れであったのだ⁽²⁶⁾。

（2）解放前の記憶

3・1運動以後、3・1の記憶はどのように継承されていったのであろうか。言論媒体を見ると、国内では朝鮮総督府の代弁紙である『毎日申報』には3・1運動に関する記事は全く出てこないが、朝鮮人の言論媒体である『東亜日報』『朝鮮日報』には、毎年3月になると3・1運動を象徴する場所である塔洞公園、徳寿宮、泰和館の春の風景を写真で紹介して、3・1運動を記憶しようとした。「春を迎えるこの公園（塔洞公園—引用者）…ああ、3月を迎える八角亭…八角亭よ、記憶しているだろうか？その時、その事を？…記憶が尚新だろうか？その時が既に5年を過ぎようとしているのか。私たちはあなたの懐で大きく声を出し、ごった返していた時が。…の人たち（日本人—引用者）は上野、日比谷を自慢するが、私たちは永遠におまえを自慢する」（春坡「春を迎える塔洞公園」『開闢』第33号、77頁、1923年3月1日）。朝鮮人系の新聞や春坡（朴達成—引用者）はこのように塔洞公園の八角亭を擬人化して、3・1運動の経験が記憶されることを強く望んだのである⁽²⁷⁾。また、朝鮮国内の人々は3・1運動記念日を様々な行動で記憶した。記念方法も社会主義者たちは実践的な“記念闘争”を行い、民族主義者たちは行事を中心として“記念式”を開いた。1920年代以降、国内では3・1運動を記念するために檄文と太極旗を制作して撒布して奇襲的な万歳示威を行った。

海外では、大韓民国臨時政府の機関紙『独立新聞』が3・1運動関連の記事を多く書いており、朴殷植は『韓国痛史』（1915年刊行）の執筆に引き続き、『韓国独立運動之血史』（1920年刊行）を書き、『血史』の後編は3・1運動に費やしている。朝鮮総督府が朴殷植の著作をどれほど危険視したのかということは、総督府が16年間の歳月をかけて編纂した『朝鮮史』（全35巻）の編纂要旨に表れている。「韓国通史と称する在外朝鮮人の著書の如き事の真相を究めずして、漫りに妄説を逞しうす。此等の史籍が人心を蟲惑するの害毒、眞に言ふに勝へざるものあり」（朝鮮総督府朝鮮史編修会編『朝鮮史編修会事業概要』1938年刊）。朝鮮総督府は、朴殷植の著書が人心を甚だしく惑わしており、

(25) 拙稿（2010）「民族主義と社会主义」（拙著『朝鮮の歴史から「民族」を考える——東アジアの視点から』明石書店＜明石ライブラリー139＞、2刷2016年）。

(26) 拙稿（2018）「海外朝鮮独立運動における社会主义と民族主義および国际主義との葛藤」（『朝鮮大学校学報』第28号）。

(27) 柳時賢（2009）「1920年代3・1運動に関する記憶——時間、場所そして民族／民衆」（『歴史と現実』第74号、2009年12月）。＊朝鮮語。

その害は計り知れないとして、公明的確な史書を提供する方が朝鮮人の同化に効果があると、編纂の目的を明らかにしている。これは朝鮮史を自分たちの都合に合わせて再構成し、近代史学の名の下で日帝の侵略と植民地化の正当化をはかろうとしたものである。終始独立運動の統一と団結を訴えてやまなかつた朴殷植は、1925年亡くなる前に“独立運動をするなら全民族的に統一してなさねばならない”という遺言を残している⁽²⁸⁾。

当時の独立運動家たちは3・1運動記念日を迎えるに際して、中華ソヴィエト共和国中央臨時政府、中国共産党東満特委汪清県委、汪清県中韓反日会などの名義の檄文が撒かれた。檄文には、「闘争的ノ三月一日！戦血ヲ以て彫刻シタル三月一日！工場、農村、街頭、学校各群衆総動員シテ定期的ニ資産階級地主ト一戦ヲ交ヘル三月一日ハ再ヒ迫ッタ！（中略）中韓勞苦群衆ハ韓国民族ヲ解放シテ三一ヲ記念セヨ／東満中韓勞苦群衆ハ華韓革命ヲ援助セヨ／一切走狗団体ヲ撲滅セヨ／一切愛國主義ヲ打倒セヨ／中韓勞苦群衆ハ團結シテ起チ強盜日本帝国主義ヲ打倒セヨ／韓国民族解放万歳／中韓民族聯合万歳」（中華ソヴィエト共和国中臨時政府）、「三一運動ノ十三年後ナル今年ニ日本帝国鉄路線ハ満州ノ領土ニ踏ミ入り満州ノ中韓勞苦群衆ヲ屠殺シ吉会鉄道ヲ修築シ満州ニ於ケル中国民族ノ地位ハ全ク韓国民族ト同一トナリタリ。中国及韓國ノ勞苦群衆ハ須ラク韓国民族ト聯合シテ起チ日本帝国主義ニ反対スヘシ中国民族ハ必ス韓国民族運動ヲ援助シテコソ自己ノ解放ヲナスコトヲ得ヘシ全東満中國民衆等ヨ韓國兄弟ノ流血三一運動ヲ記念セヨ」（中国東満特委汪清県委）、「中韓群衆ハ武装シテ起チ日本帝国主義ヲ駆逐セヨ／帝国主義ニ投降シタル中国軍閥地主資産階級ヲ打倒セヨ／日本帝国主義ノ走狗タル韓国民族主義ヲ消滅セヨ／地主資産階級の国民党及満州新政府ヲ打倒セヨ／三一韓国民族解放運動ヲ記念セヨ／中華ソヴィエト中央政府ヲ擁護セヨ／中華ソヴィエト政府「少数民族自決」政綱ヲ擁護セヨ／中韓民族解放万歳」（汪清県中韓反日会）とあるように、中国共産党が指導する中韓連合の反日帝国主義、反満州国、反国民党、反地主資産階級闘争を闘争目標にあげている⁽²⁹⁾。この内、「一切の愛國主義を打倒せよ」「日本帝国主義の走狗たる韓国民族主義を消滅せよ」の「愛國主義」や「韓国民族主義」は、「民生団朝鮮独立党」が宣伝する「満州の朝鮮への分離独立」を指している。しかし、実態がほとんどなかつた「民生団」を過剰意識したことは、中国共産党の指導に見られる大国主義的傾向と相まって、東満地域で多くの朝鮮共産主義者が肅清される悲劇が起こつた。

1936年に結成した抗日民族統一戦線組織・祖国光復会の3・1運動認識はどうであったのか。祖国光復会創立宣言では、「3・1運動では全民族が全国各地で反日蜂起を起こし、賢明で勇敢なわが民族の気概を満天下に示した」と評価し、「全朝鮮民族は階級、性別、地位、党派、年齢、宗教の違いを越え、一致団結して日本帝国主義侵略者とたたかい、祖国を光復し、眞の朝鮮人民政府を樹立するであろう」とあるように、あらゆる違いを越えて、全民族が一致団結して戦つた3・1運動を高く評価している。祖国光復会の機関誌を『三・一月刊』と命名したのは、民衆的・民族的な運動であった3・1運動の記憶が民族統一戦線組織である祖国光復会の性格と重なつたからであろう。し

(28) 拙稿(2013)「朴殷植——『大韓精神』と『大同精神』」(『講座東アジアの知識人2——近代国家の形成』有志舎)。

(29) 姜徳相解説(1976)『現代史資料30 朝鮮6』みすず書房。

かし宣言では、3・1運動は統一的な政治綱領と正確な闘争方針の欠如、反日愛国力量の強固な統一団結をなし得なかったために最後の勝利を収めることができなかつたとも指摘している⁽³⁰⁾。

大韓民国臨時政府の理論家といわれていた趙素昂は、3・1運動に関連する文章を二つ残している（「第15周年3・1節に臨じて」「3・1運動第21周年記念宣言」）。彼は3・1運動の肯定面について、“打倒日本”“大韓独立”という共通の政治的目標の下で“各階級の政治的協同”が成し遂げられたことと、大衆的示威運動、日本軍警との肉薄戦、警政機関への襲撃破壊のような大衆の直接行動が運動の主力になったとする一方、民衆を結集させ正しい闘争方略を具体的に提示する，“指導的革命党”的欠如などの限界性を指摘している⁽³¹⁾。

在日朝鮮人も3・1運動記念日に際して様々な形で行動した。在日朝鮮人の3・1運動記念日闘争については、裴姫美が東京を中心にその様相と特徴について以下のように明らかにしている⁽³²⁾。

1920～24年には留学生を中心に日比谷公園、上野公園などで3・1記念集会を開催し、太極旗をかざして万歳行進を開始しようとするも、官憲に検挙された。中津川朝鮮人労働者虐殺事件（22年）に対する抗議と真相究明運動をきっかけに留学生と労働者との連帯が強まり、23年、24年の記念集会は留学生、労働者、思想、女性などの諸団体が共催して行われたが、すぐに検挙されてしまった。1925年には多様な共産主義や労働者団体が組織され、留学生、思想、労働、宗教団体が連帶運動を展開する一方、団体間の葛藤により25年、26年の3・1記念闘争は共産主義系団体が主導した。1927年2月には在日朝鮮人団体協議会が結成され、運動の広がりを見せたが、以降、相次ぐ予備検挙と大規模検挙で集会は不可能となり、ビラで痕跡を確認する程度である。

朝鮮人団体が日本の団体へ解消、合流した1930年代以降30年代半ばまでは、全協（日本労働組合全国協議会）と反帝同盟の朝鮮人活動家と組合員を中心に各地域や職場を基盤にした懇談会開催とビラ配布を通じて3・1運動を記念し、朝鮮の独立と反帝反戦を訴えた。朝鮮人だけの民族団体が解散し、日本共産党系の団体が中心をなすことで民族主義系との連帯が難しくなったため、30年代は20年代のような統一した大規模の動きは見つからない。ただ、労働組合中心で、在日朝鮮人の暮らしにより密着した形で行われ、日本の団体活動の一環であったため、日本人労働者および活動家との連帯にその意義がある。この時期、共産主義や労働運動における朝日連帯は、解放直後によみがえり、朝鮮人運動と日本の社会・労働運動との提携がなされる土台を作った。

大韓民国臨時政府がある中国・上海でも1920年に3・1運動記念祝賀式が開催され、700余名の同胞が参加した。呂運亨が司会をし、李東輝国務総理、孫貞道臨時議政院議長が各自祝辞を述べ、万歳三唱をした後、市街地を行進した。翌年も3・1記念式が開かれた。その他、中国東北地方、中国閨内、アメリカなど海外の朝鮮人社会でも様々な形で3・1記念式が行われた⁽³³⁾。

(30) 『祖国光復会運動史(1)』朝鮮労働出版社、1986年。＊朝鮮語。

(31) 三均学会編(1979)『素昂先生文集(上)』たいまつ社。池秀傑(1989)「3・1運動の歴史的意義と今日の教訓」(韓国歴史研究会・歴史問題研究所編『3・1運動70周年記念学術シンポジウム論文集——3・1民族解放運動研究』青年社)から再引用。＊朝鮮語。

(32) 裴姫美(2017)「東京地域在日朝鮮人の3・1運動記念日闘争の様相と特徴——1920年代～1940年代」(『韓国独立運動史研究』第59号、2017年8月)。＊朝鮮語。

(33) 崔善雄(2009)「3・1運動記念儀礼の創出と変化」(『歴史と現実』第74号、2019年12月)。＊朝鮮語。

(3) 解放後の記憶

解放直後の政局は、脱植民地をめぐる民族勢力と反民族勢力との対立が次第に拡大していく過程であった。このような対立は、3・1運動に対する評価も重要な争点となり、南朝鮮地域では3・1記念式典が別個に行われた。この3・1記念式典について、池秀傑は次のように整理している⁽³⁴⁾。

1946年3月1日、解放後最初の3・1記念集会が行われるが、民主主義民族戦線側は南山、大韓国民党代表民主議院は東大门運動場にて別個に開催することとなった。それは、その前に李承晩と韓国民党側が提案した「民族大団結論（民族和合・階級和解）」と「臨時政府法統論（人民共和国否定・信託統治反対）」をめぐって激烈な論争があった。自己の反民族性、反民衆性を覆い隠そうとする李承晩・韓国民党側の提案に対して、朝鮮共産党側は、3・1運動は労働者、農民、小市民、学生が主導したものであり、臨時政府が3・1の精神を具現したとの主張には根拠がなく、自主的統一民族国家建設の主体は労働者をはじめとする民衆であると批判した。こうして両陣営は別個に集会を行うことになったのである。翌年の3・1集会も別個に開催されるが、群衆の間で流血衝突が起り、16名の死者と多数の負傷者を出すに至ってしまった。

1948年に入り、「単政反対救国闘争（「2・7救国闘争」）」を前後して南朝鮮労働党側は以前とは異なり、3・1運動の現実的な教訓として帝国主義・米国との非妥協的な闘争を主張するようになった。彼らは、「民族解放闘争の勝利は請願・哀願などで達成されるものではない。帝国主義者との無慈悲な非妥協的闘争によってこそ成就できることを教えてくれる」（南朝鮮労働党中央委員会「朝鮮人民に号召する——3・1運動29周年記念に際して」）と主張して、単政樹立を阻止するための反帝・反米闘争の重要性を大衆に宣伝した。済州島における48年4・3民衆抗争は、前年の3・1運動記念集会に対する弾圧をきっかけにして起こったが、単独政権樹立後は、民族勢力に対する弾圧が強化され、3・1運動記念集会は官製のものだけが許されるようになり、「50年前の3・1運動が日帝の侵略に対して民族が蹶起・抗拒したならば、今日の3・1節は自由大韓を武力で赤化しようとする共産侵略者とたたかい勝利することができる反共建設の汎国民的蹶起を決意する日にならなければならぬ」（1969年大統領記念辞）とあるように、3・1精神が歪められ、反共理念にとって代わってしまったのである。

北朝鮮地域では1946年2月1日に朝鮮共産党北朝鮮分局、朝鮮民主党、朝鮮新民党、天道教青年党、各社会団体を網羅した3・1運動記念共同準備委員会が組織された。2月中旬には党北朝鮮分局中央第4次拡大執行委員会で3・1運動記念に対する決定書を採択した。3・1運動記念週間が設定され、工場、企業所、農村などで講演、談話などの解説宣伝が行われ、出版報道宣伝、芸術宣伝、生産突撃運動が強化された。3月1日、平壌駅前の広場で3・1運動17周年記念大会が開催され、金日成・北朝鮮臨時人民委員会委員長が「3・1運動27周年を迎えて」という演説をした。閉会後、群衆示威が行われた⁽³⁵⁾。

金日成委員長は演説で、「1919年3月1日は、わが民族が〈日本人と日本軍は出て行け！〉〈朝鮮独立万歳！〉のスローガンを声高く叫びながら、強盗日帝に反対して全民族的闘争を展開した日で

(34) 前掲、「3・1運動の歴史的意義と今日の教訓」。

(35) 許貞淑（1986）『民主建国の日々に』朝鮮労働党。＊朝鮮語。

あり、「わが民族が日本帝国主義たちに大きな打撃を与えた日です」「私たちはわが民族の高貴な精神を忘れてはならず、この精神を倣って民主主義民族統一戦線の旗の下で固く団結し、あらゆる困難をものともせずに、新しい民主朝鮮を建設するために献身的に奮闘しなければなりません」と、大会の目的を示した。演説では、「3・1運動を通じて、わが人民は世界人類の前に、朝鮮民族は生きているばかりではなく、亡國奴の生活を願っておらず、自由と独立のために最後までたたかい勝利するという精神に充満していることを示しました」と、その意義を称えた。また、3・1運動が失敗した原因について、運動を指導する革命的階級と革命的党が存在しなかったこと、ブルジョア民族主義者たちの無抵抗主義と政治的投機行為、国際的な支援を受けることができなかつたことをあげている。演説では、民主主義的な新しい朝鮮の建設のための課題として、①親日分子・反動勢力の肅清、民主主義的民族統一戦線の強化、②増産運動と人民生活の安定化、③土地問題の解決、④教育制度の改革、民主主義的教育制度の実施、⑤モスクワ3相会議決定を支持擁護、⑥ソ連人民との親善関係強化をあげた⁽³⁶⁾。

同日には、平壌の章台峴教会（長老派）でも独自の記念礼拝が行われた。しかし、赤衛隊員が黄殷均牧師を逮捕連行したため、激憤した信徒たちは太極旗と十字架を先頭に街頭デモを繰り広げた。また、平壌駅前で行われた記念大会でも、演壇に向かって手榴弾が投げられ、それを防ごうとしたソ連軍将校・ノヴィチェンコ准尉が重傷を負うという事態も起こった。犯人は南朝鮮から派遣された白衣社の決死隊であった。その後も、北朝鮮要人を狙った彼らのテロが続いた⁽³⁷⁾。

在日朝鮮人も本国と歩調を合わせて3・1運動記念行事を行った。金誠明と上記の裴姫美は解放直後から1948年までの記念式の様子を明らかにしている。その内、東京で開催された大会の様相を整理すると次の通りである⁽³⁸⁾。

在日本朝鮮人聯盟（以下、朝聯と略する）⁽³⁹⁾は、1946年に解放後最初の3・1運動記念大会を開催した。朝聯は各地方本部・支部・分会に3・1運動の意義や記念大会の趣旨を熟知し、「3・1革命記念闘争」のために1カ月の準備期間を設けた後、3月1日に日比谷公園大広場で数万名が参加し、「3・1革命記念人民大会」と「革命運動犠牲者追悼式」を開催した。正面には祭壇、左右に太極旗と朝聯旗が飾られた。各団体代表が革命運動犠牲者追悼文を朗読した後、3・1運動の体験談と情勢に関する記念講演があった。「朝鮮完全独立万歳！朝鮮人民共和国万歳！民主主義民族戦線万歳！」を三唱した後、街頭に出て行進を開始した。マッカーサー司令部前で太極旗を振りながら連合国に万歳で感謝の意を表し、皇居や警視庁の前で「朝鮮独立万歳」を叫んだ。1947年は、2月に朝聯、在日本朝鮮民主青年同盟（民青）、各組合、文化芸術団体、新聞社など21個団体が「3・1運動28周年記念闘争協議会」を設置して準備をした。3月1日、日比谷公園野外音楽堂で1万5千名が参加して「3・1革命記念大会」が開催された。三一政治学院学生の革命歌齊唱、追悼式の後、開会され、布

(36) 金日成（1979）『金日成著作集』第2巻、朝鮮労働党出版社。＊朝鮮語。

(37) 都珍淳（1997）『韓国民族主義と南北関係——李承晚・金九時代の政治史』ソウル大学校出版部。＊朝鮮語。

(38) 金誠明（2018, 2019）「三・一運動100周年と在日朝鮮人——朝連の三・一記念闘争と三・一認識(1)(2)(3)」（『留学同情勢ニュースブログ』2018年11月26日、12月14日、2019年1月5日）。裴姫美、前掲論文。

(39) 1945年10月に創立。翌年1月までに沖縄以外の全国の都道府県に地方本部を設置。8月現在、541支部、1,013分会をもつ。

施辰治の経験談および祝辞、ソ連代表と日本共産党代表、中華日報、産業別会議議長、沖縄人連盟、全日本労働組合会議および華僑総会の祝辞があり、閉会後に街頭行進を行った。

一方、1946年10月に結成した民団⁽⁴⁰⁾は、1947年2月に『民団新聞』第2号に3・1運動記念特集として『独立宣言書』と団長・朴烈「3・1記念日を迎えて」、布施辰治「3・1運動の思い出」を掲載した。次いで3月1日に日比谷公園公会堂で5千名が参加した「第28回3・1独立記念式典」を開催した。連合軍と在日朝鮮人各団体、日本社会党、各団体が来賓挨拶をし、建青委員長の開会辞、民団団長の独立宣言書朗読、連合国に対する独立請願決議文採択要請、中華民国駐日代表団長代理と米国陸軍大尉ハム・ヨンジュンの演説、米軍政庁連絡官の挨拶、民団事務局総長・元心昌と建青ケ・ヘリヨンの演説、在日同胞の処遇改善と独立万歳を三唱して、閉会した。

1947年の両団体の3・1運動記念大会は、若干の違いがあっても著しい対立様相は見られない。朝聯は、日本共産党と中国、ソ連、沖縄人、被差別部落民と連携し、先烈の追悼に重点を置き、全国各支部別に運動を積極的に展開し、民団は、日本社会党および台湾、米軍政庁と連携するなどの違いがあったが、布施辰治が両団体に關係しており、犠牲者へ黙禱をささげ、本国の完全独立を決議するなど、共通点が見られる。その理由を考えると、民団は朝聯に反対する者や親日派の人々によって組織されるが、初期民団の一番活発な人たちは建青に属したグループであり、思想的には右派民族主義に近かったと思える。だから梶村秀樹も指摘したように、両団体は表面的には対立しあっているように見えながらその反面、民族主義、脱植民地主義という点で相通ずる感覚があり、今日の民団の側から歴史を振り返る場合でも、ある意味では朝聯を出発点に置く形で描かなければならないとさえ思われる。現在、民団中央本部の建物の中に入っている在日韓人歴史資料館の初期展示物に朝聯関係が多いのを見ても、そのことをよく示している⁽⁴¹⁾。

しかし、1948年に入って南朝鮮単独選挙の実施、朝鮮分断が現実化するなかで、3・1記念式をめぐる両団体の対立が顕著に表れてくる。朝聯は2週間の準備を経て、1948年3月1日、皇居前広場で8千名が参加して3・1運動29周年記念人民大会を開催した。大会では3・1革命精神継承と完全自主独立獲得、自主的民主統一政府の樹立、米ソ両軍の即時撤退、南朝鮮単独政府樹立を策動する反動分子の肅清、朝鮮人民軍万歳、民主主義愛國者の即時釈放、人民委員会への政権移譲、民主主義民族戦線万歳、日本人民との共同闘争を通じて生活の危機の打開などを訴えるスローガンが掲げられた。閉会後、街頭行進を行った。48年の記念大会では3・1運動の歴史的意義が反帝国主義闘争であったことが強調され、そうした教訓を活かし、現在の闘争課題を反帝国主義・反米闘争とする姿勢を明確にしていったのである。一方、民団は、3月1日に日比谷公園公会堂で3千名が参加して「3・1運動記念民衆大会」を開催した。大会では国連の統一独立案支持、人民共和国絶対反対、在留同胞の国際的地位向上、在留同胞の準連合国民待遇の獲得を訴えるスローガンが掲げられた。閉会後、太極旗とアメリカ、イギリスの国旗を先頭に街頭行進を行った。このように1948

(40) 朝鮮建国促進青年同盟（1945年11月結成、略称建青）12地方本部と新朝鮮建設同盟（1946年1月結成。略称建同）5地方本部など約20団体が1946年10月に合同して在日本朝鮮居留民団（略称民団）を結成する。

(41) 梶村秀樹（1980）『解放後の在日朝鮮人運動』神戸学生・青年センター出版部（『梶村秀樹著作集第六巻 在日朝鮮人論』明石書店、1993年に収録）。拙論（2010）「在日同胞の現状・歴史・可能性」（前掲拙著『朝鮮の歴史から「民族」を考える——東アジアの視点から』）。

年の朝聯と民団の大会が掲げたスローガンは全く正反対であった。

朝鮮半島に分断国家が樹立した以降も、南北や朝鮮総聯、民団では3・1記念集会が行われるが、その違いはさらに鮮明になっていく。共和国では、3・1運動における労働者、農民の主導的役割、その後の民族解放闘争における社会主义運動の役割を高く評価し、「民族代表」の外勢依存性、上海臨時政府の限界性を強調する。また、現代の政治的課題として、反米闘争と祖国統一を一層強調した。韓国では、3・1運動における「民族代表」の指導力、「非暴力闘争」の創造性を高く評価し、上海臨時政府を「継承」した大韓民国の「法統性」を強調することによって、「勝共・反北統一」の正当性を訴える。

朝鮮半島における分断政権の出現、朝鮮戦争による南北分断の固定化は、在日朝鮮人に分断を前提としての「祖国」との連結がはかられていくことを余儀なくした。そのためか総聯、民団における3・1運動記念大会は、ほぼ南北「本国」の内容と重なっている。

おわりに

3・1運動は今なお朝鮮人のナショナリズムの原点として生き続けている。歴史的な3・1体験は血肉と化した「民族的記憶」として解放後も語り継がれ、現在の統一運動に結びついて生きているのである。いわば民族的課題の最大公約数であった解放前の独立の課題（「三一理念」と、解放後の統一の課題（「統一理念」）とは、常に「二重写し」なのである。そのような意味において、3・1運動史は現在の生を共有する私たちすべての同時代史であり、絶え間ない観察を要する「生きた歴史」だといえよう。

しかし、解放前の社会主义運動陣営と民族主義運動陣営との間で、解放後も左右間、南北間で3・1運動の主導層や「民族代表」、大韓民族臨時政府に対する評価をめぐって、政治イデオロギーの対立とも結びついて著しい差異を生んだ。

朝鮮総聯も民団も、3・1運動の認識に関して南北朝鮮の公式的見解をほぼそのまま踏襲しているのが現状である。従来の南北両当局の海外同胞政策は性格を異にしつつも、体制競争の次元で海外同胞に接する“朝鮮（韓）半島中心主義”的傾向が多分にあったことは否めない。しかし、在日をはじめ海外同胞の観点から見れば、このような“朝鮮（韓）半島中心主義”は必ずしも願わしいことではないだろう。物理的に分断されている南北朝鮮とは違い、総聯、民団の上部組織の表面的な対立とは別に、下部組織では常に交流があり、同胞の日常生活の場では様々な国籍や団体所属の人々が入り混じっているのが実態である。その上部組織も6・15共同宣言が切り開いた環境の下で、2006年5月に「総聯、民団5・17共同声明」を生んだ。しかし、民団内部の保守派の巻き返しによって共同声明の「白紙撤回」宣言と執行部の退陣という事態が引き起こされるに至った。

その時から12年が過ぎた2018年に、3度にわたる南北首脳会談が行われ、板門店宣言、平壤共同宣言が採択され、2019年に3・1運動100周年を共同で記念することに合意した。この道がもはや逆行できない流れである以上、総聯、民団両団体の和解が早晩、再び進むことは間違いないであろう。その第一歩として、本国と同様に総聯、民団も3・1運動100周年を共同で記念することができると思う。3・1運動100年を迎える在日朝鮮人の立場から3・1運動の記憶を継承していくため

に提起される課題は、第一に、総聯対民団の二項対立構造を克服し、民族団結・統一のパートナーであるとの意識をもち、統一運動・同胞権利擁護など諸問題を協働していくことであり、第二に、3・1運動など朝鮮近現代史の理解において、これまでのイデオロギー的な偏り、資料の偏りを克服し、客観的で新しい研究成果に基づいた歴史認識を獲得して共有することであろうと考える。新しい開かれた環境は必ず眞実により接近した新しい歴史認識を生むのである。そのことによって、新しい環境はより豊かになっていくのだと思う。

(かん・そんうん 朝鮮大学校朝鮮問題研究センター長)